

## 龍谷大学世界仏教文化研究センター 公開研究会

|             |  |
|-------------|--|
|             | <b>仏教と聖地に関する総合的研究<br/>— 聖なる表象とは何か —</b>  |
| <b>開催日時</b> | Day1 : 2017年9月28日(木) 13:15~14:15<br>Day2 : 2017年10月5日(木) 13:15~14:15   |
| <b>場所</b>   | 龍谷大学 大宮学舎 清風館 3階共同研究室  |
| <b>発表者</b>  | ①唐澤太輔 (龍谷大学世界仏教文化研究センターPD)<br>②大澤絢子 (龍谷大学世界仏教文化研究センターRA)<br>③亀山隆彦 (龍谷大学世界仏教文化研究センターRA)<br>④李 曼寧 (龍谷大学世界仏教文化研究センターRA)<br>⑤金 澤豊 (龍谷大学世界仏教文化研究センターPD) |
| <b>司会</b>   | 楠淳證 (龍谷大学アジア仏教文化研究センター長、龍谷大学文学部教授)   |
| <b>共催</b>   | 龍谷大学世界仏教文化研究センター、仏教文化研究所<br>「仏教と聖地に関する総合的研究—聖なる表象とは何か—」(代表：楠淳證)  |
| <b>協力</b>   | 龍谷大学アジア仏教文化研究センター  |
| <b>参加人数</b> | Day1 : 21人, Day2 : 27人   |

### 【研究会のポイント】

2017年4月に、龍谷大学仏教文化研究所の新しい共同研究プロジェクト「仏教と聖地に関する総合的研究—聖なる表象とは何か—」が発足した。本研究発表会は、一般公開で行われ、これまで約半年間の研究の成果について5名の研究員が発表した。

日本には多くの「聖地」が存在するが、それらはどのようなプロセスで創出されたのか。本プロジェクトでは、その「表象 representation」の過程を明らかにしていく。また、仏教にまつわる古の聖地を研究し、そこに託した人々の思いや営為などについて、多角的な視点からアプローチしていくことを目的としている。

## 【研究会の概要 Day1(2017年9月28日)】

### ■唐澤太輔

発表題目「南方熊楠が見た聖なる表象—聖地那智山での体験とともに—」

生と死、この世とあの世、仏教と神道など、さまざまな要素が相互参入するクロスボーダーの地＝那智山で、南方熊楠(1867～1941年、民俗学者、博物学者)は、いわゆる「体外離脱」を経験した。熊楠の日記や書簡、論考からは、この体験が、彼にとってとてつもなく大きな「意味」を持っていたことがわかる。『南方熊楠日記』などでは省略されているが、日記の現物には、挿絵までつけてその時の様子が克明に記録されているのである。

熊楠が那智山で見た聖なる表象とは、端的に、羽山繁太郎(1866～1888年)と羽山蕃次郎(1871～1896年)であった。二人は熊楠の同性愛の対象であったとも考えられている。若くして亡くなった二人は、熊楠の目の前に何度も「ヴィジョン」として現れている。これは熊楠にとっての「事実」だったのである。

熊楠は「過たるは過去、未来は未見なり。然し何れも実に現にあるなり」と述べている。つまり、熊楠は、那智山で、過去も未来も混合された「現在(まさに今この瞬間)」に圧倒的なリアルを感じていたのである。

熊楠が聖地那智山で得ていた感覚は、我々から見れば「特殊」であるかもしれない。しかし、それを「異常」として捨て置くべきではない。もしかしたら、熊楠が感じとっていたことこそ「普遍性」をもつ事柄かもしれないのではないか。そもそも、なぜ我々は、この自己と他者との区別や過去→現在→未来という「時間の矢」をもつことが「正常」だと思い込んでいるのかを深く考えなければならぬ。このような区別や矢印など消えてしまい、すべてが統一された根源的な場があるのではないか。このようなことを忘却することこそ実は「異常」なことではないだろうか。

### ■大澤絢子

発表題目「「越後の親鸞」像の形成と確立過程—『御伝鈔』から近代へ—」

本発表では、越後における親鸞のイメージがどのように構築されてきたのかを伝記と公共的記憶の形成という点から考察した。

親鸞は建永二(1207)年に念仏停止により越後へ流罪となったが、越後時代の親鸞についての歴史的史料はほとんどない。一方、流罪となった親鸞は越後国府近くの居多ヶ浜に上陸したとされ、「越後七不思議」などが語り継がれている。

親鸞が越後国国府へ配流となったことを記すのは覚如によって記された『御伝鈔』であるが、「越後の親鸞」とそれにまつわるイメージは近世の親鸞伝を通して次第に詳細なものになっていった。

ところが近代に入ると、それまでの伝承に対して史学的検証が行なわれ、越後時代の親鸞も不明なものとなされた。そうしたなか大正10年に「恵信尼文書」が発見されて以降、親鸞の妻は恵信尼として確定され、同時に越後も親鸞と恵信尼が共に暮らした場所として注目されていくのである。この発見の直後に生じた親鸞ブームの時点では、前年の「恵信尼消息」の発見の影響はほとんど見られないが、

次第に文学作品においても、親鸞と恵信尼の夫婦像が定着していく。また越後では、大正期以降に親鸞にまつわる碑や看板が次々と作成され、公共空間において親鸞に関する物語が形成されてきた。そうした公共的モニュメントを中心に人々がその土地を訪れ、親鸞についての語りが繰り返されてきたのである。

このように、「越後の親鸞」は近世の親鸞伝を通して次第のその詳細が伝えられ、近代以降は学知がその土地と物語、そして公共的モニュメントと結びつき、そのイメージが定着してきた。史実の検証と「語り」の再生産、およびそれに伴う公共的記録の形成が相俟って「越後の親鸞」のイメージは確立してきたと言える。

## 【研究会の概要 Day2(2017年10月5日)】

### ■ 亀山隆彦

#### 発表題目「参詣曼荼羅の時空間—立山曼荼羅における地獄表現の諸相—」

本発表の主題は、聖地の複雑性と変化である。聖地とその「マーカ―」（聖地とそれ以外の場所を区別する要素）が、社会と歴史の中で発展し複層化するという問題について、日本の「社寺参詣曼荼羅」、その中でも「立山曼荼羅」を題材としながら考察を試みた。はじめに社寺参詣曼荼羅とは、一社ないし一寺の境内より広い区域の信仰圏を取り込み、その信仰圏内の建造物、景観、参詣者、さらに社寺の縁起や祭礼等を描いた掛幅形式の宗教画を指す。一般に、「絵解き」と呼ばれるパフォーマンスに用いられたといわれる。立山曼荼羅もその参詣曼荼羅の一種で、同曼荼羅の中には、富山県に所在する立山に関わる山岳宗教、いわゆる「立山信仰」の内容が網羅的に描き込まれている。

発表の内容に関して、もう少し立ち入って述べておくと、上述の立山曼荼羅内の地獄の表象、すなわち「立山地獄」に注目し、それを構成する各種表現の変化・複雑性について検討を試みた。その結果として、「立山地獄」を構成する様々な表現には、短く見積もっても7~800年の時間差が存在することが明らかになった。例えば、「八熱地獄」の表現は平安末期のものだが、「血の池地獄」は室町時代、ミクリガ池に準えられた「寒の地獄」の表現は江戸時代の成立と考えられる。

以上のように、立山地獄の表現は時代と共に変化・複雑化していったと推定される。それはつまり、聖地としての立山を他の場所から区別する「マーカ―」そのものが、時間が経過する中で展開・複雑化していったと解釈できる。

### ■ 李曼寧

#### 発表題目「仏教説話にみる海の表象—もう一つの聖地像—」

本研究は、仏教説話から窺える日本史上の仏教聖地認識の出現時期を確認した上で、「海」という特別な仏教聖地認識の生成と変化の流れについて考察をした。

①「仏教説話から窺える聖地認識の発端」。現存する諸仏教説話集の中の諸山巡行や聖地参詣の記述の分布事情から、『日本霊異記』が成立した9世紀初頭までは、「山」に対する聖地認識はまだ薄く、

それが諸山巡行や熊野参詣の事例が多出するようになった9世紀半ばぐらいまでに広がることを得て、『法華験記』が成立した11世紀半ばまでに、清水寺のような山自体でない聖地への参詣行為も一般化になったと推定した。

②「海に入ること—四天王寺信仰と捨身入水行—」。『拾遺往生伝』（1139以前成立）以降の仏教説話集に散見する四天王寺での「入海」例は、単なる捨身行の中の入水行というものではなく、その裏には、四天王寺が「昔釈迦如来転法輪所」であり、その西門は「相当極楽土東門中心」という四天王寺信仰があり、その発祥は『四天王寺御手印縁起』が世に現れた11世紀初頭以降のことであったと考えられる。

③「海に出ること—補陀落信仰とのかかわり—」。千年ほどの間で日本各地で行われ、特に那智補陀落山寺では慣例化・儀礼化された「補陀落渡海」は、もともと厳格な捨身行ではなく、生きながら観音浄土に参ろうとする行為であった。玄奘『大唐西域記』にある「布呾洛迦山」の記述はその根拠であったと考えられる。

総じていえば、日本古代の仏教者たちの「海」への進出はより過酷で、死に繋がる「聖地参り」行為であった。これは、仏教の教義や交流史、さらに日本の地理事情に深く関わっているのである。

## ■ 金澤豊

### 発表題目「聖なる表象としての災害モニュメントと仏教者の役割」

本発表は、自然災害時における仏教者の役割を検討する中で、三陸沿岸部における災害の記憶装置としてのモニュメントに着目したものである。新規モニュメントやモニュメント化されるもの（震災遺構）の建立の経緯は多様であり、みる人によって付与される役割が異なる。そのため、モニュメントに対する解釈の違いは、様々な議論を生み出している（直近では「釜石市鶴住居地区防災センター跡地の利用を巡って遺族と行政が対立」2017年6月30日河北新報）。問題点は地域性や被害状況の違いなどで一括りにできず、東日本の沿岸部では混沌としている印象を受けるが、中間報告として問題の本質は「忘れない」ためという目的に集約されるのではないかという仮説を提出した。また厳密には「死者を忘れない」と「教訓を忘れない」ことに集約できる可能性を示し、現地ですら得た写真や被災された方の声を紹介した。

「忘れない」ために「忘れない」ことの難しさに直面した人々が、忘却に抗うために多くの工夫を凝らし続けている。このことは記録検討され、研究の考察対象となるべきだろう。すでにヨーロッパでは「ダークツーリズム」という名称で2000年代前半から研究が進みつつある。もっとも日本において、遺族の声に応える形で「悼みの場」の災害モニュメントが多く建てられ、地域の内外から来訪者が絶えず聖地化しているのは、東日本大震災で津波の被災地域だけではない。今後は広い視野での研究が求められる。また、研究の方向性として、自然災害後に建立されるモニュメントの保存に関わる行政や地元住民の声を聞き、宗教者や仏教者の役割はどこにあるのか学際的に明確にすることをねらいとすることを確認した。

### 【研究会のまとめ】

Day1は2名、Day2は3名の各研究員が連続して成果を発表した。「聖地」を南方熊楠、親鸞という人物を通して検討する内容から始まり、山、海、災害という場所や付与される物語に着目した発表が連なった。対象とする時代も背景も異なる研究ではあったが、「聖地」をめぐるそれぞれの狙いと立脚点が明示され、共同研究の魅力と多様性を聴衆に提供できたと研究代表の楠氏は総括した。各発表の今後の方向性を確認し、盛会のうちに終了した。